

No.93 ヘンリー・ムンヤラジ —無題—

Henry Munyaradzi

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 7 月 15 日付 立川市市報記事より

ムンヤラジは、ジンバブエの作家。もともとその土地では、彫刻は呪術的なもので、祭りや儀式の際に使われていたものだ。それをムンヤラジが中心になって彫刻という独立した形式にしていった。これをショナ彫刻という。

車止めになった石柱の中に一人の(女の)子がいる。それは石と共に誕生し、石の生命のように見える。私は時々、この石の子どもに手をあてている子どもを見たことがある。その手をあてている子どもにとって、石の中の子どもは遠い友達のようなのだ。

宮沢賢治の「小岩井牧場パートIX(9)」の詩の中の、北上川の川底で探した中世代の化石を「ユリア」「ペムペル」と名付け、「ユリア、ペムペル、僕の遠い友達よ」という一節を思い出した。

作家のメッセージ / 日本住宅公団(現:UR都市機構)「ミニ通信」より

ヘンリー・ムンヤラジの作品は、ジンバブエのショナ族に深く根付いた社会的概念からその創造の源泉を得ています。

ショナ族は、ローデシア内戦後、独立国家となった後も、社会の劇的な変化を経験してきたにもかかわらず、物質的現象と人間の行動に現れる精神的な力の存在を信じています。

ショナ彫刻は、ヘンリー・ムンヤラジが設立し、今も実践し続けている流派で、自律的な芸術運動として 1950 年後半に発展し、個々の作品の創造に貢献しました。

その彫刻は上記の信念—精神的本質は、物質の中に現れる。魂は石において据えられ、姿を現す—を今も表現し続けています。

先祖の魂の力へのショナ族の信仰は、彫刻の形体に命の息吹を与えており、1957 年以降この彫刻はアフリカ大地の他の部族が作る儀式のためのオブジェに取って代わるようになりました。人は特に確認せずとも空にある崇高な神ムワリの存在を感じ取ります。

それは至る所に存在し、道徳によって人を判断しない全知の神です。

この新しい彫刻家たちは明らかに前例や伝統によって制限されることはありません。

彼らは自由に自己の手段と主題を選び、彼らの精神的信念を、自然界の言葉を頻繁に引用しながら表現してきました。その結果生まれる作品は、とらえ所がないと同時に分かりやすいものとなっています。

ヘンリー・ムンヤラジの作品は明らかに“芸術のための芸術”のコンテクスト内にあり、明らかに宗教的儀式のために作られる美術の伝統の外にあります。

彼はすべてを還元する術を自由に駆使します。

主題を無理やりわからせようとするのではなく、素材により暗示します。

イメージは石の中にあり見る人はそれに対峙するというよりは一賞すればいいのです。

ムンヤラジはクレーのように一本の線を散歩に連れ出します。

石で造られた彼の立体は 石の力強い存在感を放っています。

逆説的ですが彼の彫刻は、形はシンプルですが複雑に響きます。

素材は 堅固でありながら、多くは暗示せず、特定のものを指示しながら、その反響は原型的です。

ムンヤラジはショナの彫刻家であり伝統を再創造した流派の一員であり、作家であり、非常に個性的で独創的なイコノグラフィーの創造者です。